

毎日新聞社甲府支局 編

こぶしの花

新田次郎 物語



こぶしの花
新田次郎物語

内藤成雄 著
毎日新聞社甲府支局 編

きょうせい

〈著者紹介〉

内藤成雄 (ないとう みちお)

大正9年(1920)山梨県富士吉田市生まれ。
旧制、都留中、水戸高校を経て東北大学医学部卒業。医学博士。

現在、内藤医院(内科)院長。山梨県文化協会連合会長。富士吉田市文化協会会長。山梨県文化振興協会理事。山梨県芸術祭運営委員。
雑誌『雪解流』主宰など。

日本ペンクラブ会員

山人会会員

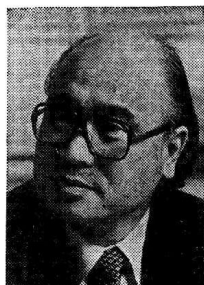
大衆文学研究会員

昭和60年度 文化庁地域文化功労者文部大臣表彰

昭和62年度 山人会中村星湖文学賞第1回受賞。

著書、「富士北麓と文人たち」(昭和61年度ぎょうせい)

現住所 山梨県富士吉田市下吉田 827



こぶしの花—新田次郎物語—

1989年1月20日初版印刷 定価 1500 円 (〒 250 円)

1989年2月1日初版発行

著 者 内 藤 成 雄

編 者 毎日新聞社甲府支局

発行所 株式会社 ぎょうせい

本 社 東京都中央区銀座7の4の12 (郵便番号104)

営業所 東京都新宿区西五軒町52 (郵便番号162)

電話 (03)268-2141(大代表)

振替口座 東京 4-10,000

〈検印省略〉

印刷 (株)行政学会印刷所 (ch) 製本 大口製本印刷(株)

※ 乱丁、落丁本はおとりかえします。

ISBN 4-324-01487-6 (5102856-00-000)

序文

藤原 てい

内藤先生はお医者さんである。それ自体が大へん多忙なお仕事である上に、公的な立場での御活躍もめざましい。このように忙殺される日々のなかで、新田の作品を、これほど多くお読み頂いているということ、それは全く神わざとしか考えられない。

「いつの日か、自分の背丈まで本を書いて、積み上げてみたい」

新田はよくこんなことを云っていた。

そして今、私は新田の書き残した本を念のために積み上げてみた。「強力伝」にはじまって、「孤高の人」、「アラスカ物語」、「八甲田山死の彷徨」、「富士山頂」、「怒る富士」、「武田信玄」等々。それは三メートル五十センチになった。丁度新田の背丈の倍に当たる。積み上げた本がくずれて、私の身边は本の海になった。まさに驚異である。このおびただしい新田の著書を、内藤先生はすべて読み上げておいでになる。妻である私でさえ、まだ

未知の部分があるというのに。

それにしてもこの読書力、いやその努力。あの多忙な日々の中でどこからこのエネルギーが出て来たのだろうか。それは取りもなおさず、先生の新田に対するかぎりなき情熱だろうと思う。しかも新田は原稿を推敲し、又書き直しをしているために、決してななめ読みの出来るようなものではない。心をこめて一字々々、拾うように読まなくてはならない。云わば読み上げることは難作業かも知れない。それを先生は見事に果たしておいでになる。

その上に、先生には、しばしば、新田の取材の折にお世話になっている。ことに富士山にかかわる物、武田信玄に関する物の折など、沢山のことを新田は教えて頂いている。

このような場に立って、先生は、この著書をお書きになっている。つまり裏づけから、肉づけまで全部が揃っている上で、稿を起こしたことになる。そのために、どっしりと重く、心の底へひびくような魔力を持っている。

おそらく先生のこの著書は、今後、「新田次郎」を研究しようとする人達、あるいは卒業論文のテーマにしようとする人達には、二度と得られない資料になることだろう。

いゝや、何よりも私の宝として、新田の佛前に供えることの出来るのは、なんとありがたいことだろう。

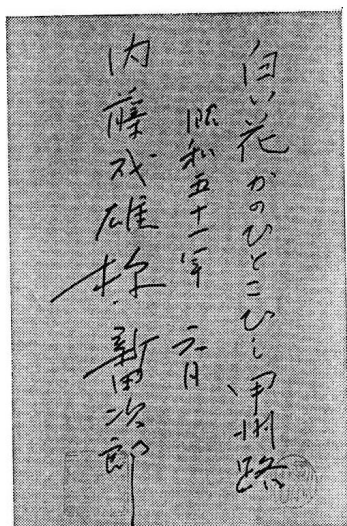
はじめに

新田次郎は甲信の山々を愛した。中でも富士山を一番愛した。富士から眺めると、西には赤石・白根（北岳）・仙丈・甲斐駒・鳳凰が、更に北には八ヶ岳が、東側目のとどく果てに大菩薩が富士の陪臣のように並んでいた。おのおの山にはすべて個性があった。

目の下には五つの湖が光り、御坂の山並みを越えて甲府盆地の三角帯が山にいだかれて見はるかせた。その隅はそれぞれ細い糸となって東は都内に南は駿河に西は諏訪に消えていた。

新田次郎はこの美しい国をいとおしく思った。彼はこの国の長い歴史とロマンを尋ねてくまなく歩きまわった。そしてこの風土に関わりをもってひたぶるに生きた人々を命をこめて書き綴った。

青年時代、冬の富士山頂の雪氷の中で過ごした数年の想い出は新田文学の心のふるさとなった。



新田次郎氏から著者に贈られた
色紙

今やまなしに騎馬の足音が聞こえる。

四百年の時代を超えた武田信玄の蹄ひづりの音が聞こえる。新田次郎が命を縮めて書いた小説『武田信玄』のため息が聞こえる。

新田次郎は白い花が好きだった。中でもこぶし「辛夷」の花が好きだった。富士北麓の春は遅いが、黒木々の枯れ色が少し艶めくとこぶしの花はいち早くその白い蕾を真澄の空に浮きたたせて咲く。花に真向う富士の残雪に融けこむようなこの白さは、ほのかな香りを春を告げる風にのせて伝える。

こぶしの花が咲くたびに新田次郎を想い出す。古武士にも似たその生きざまを追憶しながら跡を追いたくなる。

白い花かの人こひし甲州路 新田次郎

目次

序文	藤原てい
はじめに	

第一部 歩いたみち

お互いが一目惚れの結婚	13
夫人の著書『流れる星は生きている』がベストセラー	17
直木賞受賞	21
多彩な短編小説を発表	25
夢にまで見たヨーロッパ行きと新聞小説の執筆	29
富士山気象レーダー建設での重責を果たす	33
小説を書く時はその対象に惚れる	37
家来にされた新田次郎	41

ベストセラーにならなかったのは念仏のせい？	45
「山岳小説家」というレッテルへの反発	49
家庭人としての新田次郎	53
充実した作家活動	57
徹底取材	61
第一級の目で「山岳小説」を執筆	65
外国に取材した小説の執筆を始める	69
吉川英治文学賞受賞	73
努力認められ全集発刊	77
郷土の悲劇小説『聖職の碑』を発表	81
新田文学の新骨頂	85
六十四歳で取材のために剣岳登山	89
福江島の人たちと文学の交流	93
『密航船水安丸』取材旅行	97
小説『孤愁—サウダーデ』未完のまま絶筆に	101
絶筆『大久保長安』と突然の終焉	105
新田次郎文学賞創設	109

新田文学の業績と夫人の思い出、哀しみ	113
--------------------	-----

第二部 新田文学をさぐる

新田文学を分類してみると	119
「山岳小説」について	123
新田文学のバックボーン	127
「なぜ山に登るか」海洋小説と気象小説	131
完全主義	135
「時代小説」について	139
「随筆・エッセイ・紀行文」について	143
故郷 諏訪	147
こぶしの会	151

第三部 新田次郎と富士山

第二の故郷 富士山	157
-----------	-----

第四部

小説『武田信玄』

『強力伝』とモデル小宮正作……………	161
『蒼氷』『凍傷』など……………	166
自分の体験を小説『富士山頂』に……………	170
高山での難事業を通して現代を描く小説『富士山頂』……………	174
不朽の名作『芙蓉の人』……………	178
山岳宗教を題材にした小説『富士に死す』……………	182
数々の短編を発表……………	187
随筆と富士山保護論説……………	192
小説『武田信玄』を書かせた理由……………	199
信玄の青春の記録（風の巻）……………	204
天才（景虎）と秀才（晴信）（林の巻一）……………	209
川中島の合戦（林の巻二）……………	214
親子断絶（火の巻一）……………	220
強い信玄（火の巻二）……………	225

第五部

小説『武田勝頼』

影武者を仕立て命拾い（山の巻一）	230
謎の多い信玄の死（山の巻二）	236
信頼をおいた文献『妙法寺記』（文献一）	242
数多い文献を駆使して（文献二）	247
本当に書きたかったのは信玄より勝頼？	255
信玄の死後の辛酸をなめた一年（陽の巻一）	260
強い勝頼（陽の巻二）	264
長篠・設楽ヶ原の戦い（水の巻一）	269
不敗の軍団の惨敗後（水の巻二）	274
家臣離反（空の巻一）	279
新城と逆心（空の巻二）	284
亡びゆく武田（空の巻三）	288
武田家滅亡と新田次郎の感慨	293

新田次郎年譜
あとがき

.....299

第一部 歩いたみち

お互いが一目惚れの結婚

新田次郎、本名、藤原寛人、明治四十五年六月六日、長野県上諏訪町に父、藤原彦の次男として生まれた。先祖は代々諏訪家仕官の家柄である。幼い頃可愛がられた父方の祖母（藤原光蔵、ふく）からこの祖父の父が諏訪の殿様（幕末の頃の幕府老中・諏訪忠誠）のお供をして江戸に行ったことや、諏訪藩と武田耕雲斎（幕末の志士・尊王攘夷派・天狗党首・一八〇三―六五）が戦った和田峠の合戦に参加した話などよく聞かされて育った。

こんな想い出が後年、小説『武田信玄』を書く基盤になった。ペンネームは出身地諏訪の角間新田よりその姓をとり、二男に生まれたので次郎とした。旧制の諏訪中学（現・清陵高校）を経て、当時の無線電信講習所（現・電気通信大）を昭和七年卒業、すぐに中央気象台（現・気象庁）に勤務した。初の任務は気象台富士山観測所で、昭和十二年まで交代要員として富士山の登降を繰り返し返した。もともと山が好きで自分からこの任務を志願したというが、冬の富士山滞頂五年の記録が自慢でよくその話をした。後年、この経験が富士山を舞台にする小説の基盤となった。

昭和十四年、新田は同じ諏訪生まれの両角ていと結婚した。「藤原てい」という名がこ

の年から登場した。この素晴らしい夫婦のスタートである。てい夫人の自伝『旅路』を読むと、この意志の強い多感な女性の娘時代もドラマを読むようである。女学校（諏訪高女）の寄宿舎生活、ペスタロッチにあこがれた文学少女、小学校長だった父親とのギャップで退学、音楽教師の求婚等、さまざまなハードルを飛びこえた彼女のところへ、母は新しい写真をどこからか持って来た。以下『旅路』（藤原てい著）からの抜粋である。

「今度は藤原さまだよ」

わざわざさまをつけて相手を呼ぶのは母が多少相手を知っていて尊敬と敬慕の念を持っている証拠であろう。この写真は私のクラスメートのお兄さんであった。

「是非にとおっしゃるのだから、今度こそ」

「頼むから、ウンと言っておくれ」

母の意気込みはすごかった。哀願である。そして私はその相手と会った。

「まるで、もぎたての果物のようだ」

はじめて顔を合わせた瞬間、そう思った。二十八歳で氣象庁の役人で、山登りが好きで、

と簡単なことは知っていたが、よもやこのような青年が現われようとは。

「結婚しよう、この人と」